

アジア・太平洋研究センター主催，総合政策学部共催講演会 シリーズ講演会「日韓国交正常化 60 年を考える」

日 時：2025 年 5 月 21 日（水）

場 所：南山大学 M 棟 1 階 M2 教室

テーマ：最近の韓国情勢および日韓関係について

報告者：相星 孝一（前駐大韓民国日本国特命全権大使）



日本と韓国は 1965 年に国交正常化し，本年は正常化 60 周年にあたる。そこで，アジア・太平洋研究センターでは日韓国交正常化 60 周年を期してシリーズ「日韓関係を考えるシリーズ」を企画し，その初回として，前駐大韓民国日本国特命全権大使相星孝一先生をお招きして「最近の韓国情勢および日韓関係について」とのテーマでお話いただいた。相星先生の講演概要は以下の通りである。

日本と韓国の関係は遙か昔に遡ることができる。朝鮮通信使（江戸時代に日本に派遣された外交使節団）についていえば，ここ名古屋にもゆかりの地がいくつかある。また百済の武寧王の棺は日本の木材（高野槇）で作られていた。国宝の百済観音，七支刀（百済王が倭王に贈呈した剣）など，日本と韓国の関係は悠久の歴史の中にあることを意識する必要がある。

それを前提にして最近の日韓関係について見ていきたいが，昨年（2024 年）12 月の尹錫悦大統領による非常戒厳宣言については考えさせられた。大統領就任式にも参席したが，その際，自由，民主主義を強く標榜した大統領が，もちろん巨大野党によって国政運営がままならない状況が続く，ある種の危機感から非常戒厳宣言にい

たったのだろうが、韓国の国民には受け入れられない事態だったと言わざるを得ない。

そこで私自身の大使就任以降の日韓関係を整理したい。まず、コロナ禍の 2021 年 2 月に駐イスラエル大使を終えて駐韓大使に着任したが、当時の文在寅大統領から、福島原子力発電所の処理水放出について言及があり、大使館周辺では同問題の反対デモが続き、日韓関係の厳しさを実感させられた。その後、2022 年 3 月の大統領選挙で進歩系の李在明候補と保守系の尹錫悦候補が争い、尹錫悦候補が当選した。日韓関係の改善が期待されたがすぐさま回復帰朝に戻ったわけではなく、最初の半年程度は「手探り」の状態が続いた。大きな転機は 2022 年 11 月の麻生元総理の訪韓だった。これを機に、日韓・韓日議連合同総会が開催され、懸案となっていた朝鮮半島労働者問題についてもいわゆる「第三者弁済方式」を韓国政府が公表し、尹錫悦大統領が日本を訪問した。続いて訪韓した岸田総理は過去の日韓関係について「心が痛む」との表現を使い韓国側への配慮を見せた。そして、2023 年 5 月の広島での G7 サミットで岸田総理と尹錫悦大統領が共に韓国人原爆犠牲者慰霊碑を訪れ日韓関係の緊密化を印象づけた。こうした流れの中で 8 月にはアメリカのキャンプデービッドで日米韓の結束が確認された。ただ、韓国では韓国だけが積極的で日本の対応が鈍いとの不満もあった。さらに野党から「対日屈辱外交」との批判もあって、韓国与党からも「誠意ある呼応」を求める声があった。その後、日本で石破政権となって日韓関係進展への期待が高まっていたが、そうした中で非常戒厳宣言に至ってしまった。

こうした韓国内の保守と進歩の対立は、2008 年の「狂牛病騒動」、2009 年の盧武鉉大統領の自殺が引き金となったと考えられる。そうした状況に 2024 年 4 月の総選挙によって生じた「野大与小」状況が保守・進歩の対立に拍車をかけ、尹錫悦政権は難しい政局運営を強いられた。尹錫悦政権としては国民世論を意識せざるを得ず、世代間、男女間の「葛藤」への対応に苦慮し、さらには司法機関の「政治化」、「民意」、「国民目線」重視の状況が続いた。

来月（2025 年 6 月）の大統領選挙の結果についてはわからないが、こうした状況は次期韓国大統領の課題でもある。さらに「少子高齢化問題」、「年金改革」、「ソウルへの一極集中」、「過度な私教育（予備校）」熱問題、医師数を増やすための「医療改革」など、次期政権がどのように対応するのかが注目される。その一方、韓国経済の強みもある。韓国では国民全員が ID で管理されていることもあって「デジタル先進国」の地位を固めている。また韓国人は日本人に比べてリスクをとることを厭わない傾向があり、財閥系企業も迅速かつ大胆な意思決定を行う企業風土があるし、IT 関連のスタートアップ企業も多い。さらに「防衛産業」も東南アジア、東欧諸国からの需要がある。また、K カルチャー産業についてはあらためて指摘するまでもなく、つぎつぎと魅力的なコンテンツが生み出されている。次期大統領がこうした強みを利用しながら韓国が抱える課題にどのように向き合っていくのかが注目される。

大統領選挙でかりに進歩系政権となっても日本は過度に悲観する必要はない。2023 年の大統領選挙の際に、李在明候補に会ったが、少子高齢化問題など、行政経験のある政策通との印象を受けた。粘り強く対話，交流を拡充していく必要がある。

日韓関係は常に坂道を荷車でひいて登っているようなものだ。気を抜けば坂を戻ってしまう。十分配慮しながら良好な日韓関係を維持することが必要だ。

この後，フロアから，アジア通貨危機への勧告の対応，日米韓関係などについて質問があり，相星大使からそれぞれ回答をいただいた。

（文責：平岩 俊司）